1

〈水俣〉と出会う

埼玉大学水俣合宿の取り組みから

自己紹介

＊なまえ：安藤聡彦
（あんどうとしひこ）

＊しごと：埼玉大学教育学部教員

＊好きなこと：学生さんたちに
ドコマデモ着いていくこと

台湾・スマングス部落にて

お話したいこと

1）「出会う」ことについて
2）やってみる！
4）積み重ねてきたこと
5）水俣学と自分学
6）これからのこと

「出会う」ことについて

水俣病との出会い

- あなたはどのようにして水俣病と出会いましたか？
- 水俣学講義の講師の先生方おひとりおひとりはどのようにして水俣病と出会われたのでしょう？
- 原田正純先生の場合は？

「出会う」とは？

- 「出会う」とは、自分の人生の途上に立ち現れたモノ・コト・ヒトを捉え、吟味し、最終的に自分自身の生に埋め込んでいく選択的行為である。
- 換言すれば、「出会う」とは偶然なのを自らにとって必然的なものに置き換える目的意識的行為である。

安藤の場合；公害の時代に生まれて

- 1959年生まれ＝胎児性患者の皆さんとほぼ同世代
- 気づいたときには、公害問題に被われ、テレビも公害報道に埋め尽くされていた
- 教室を出て行ったひとりの友

障がいを有する同世代の連中との邂逅

１冊のパンフレットとの出会い

- 大学３年のとき、ゼミの先生から１冊のパンフレットを渡された。タイトルは『日本の公害；水俣病の授業』というもの。1968年11月に熊本市竜南中学校の社会科教諭・田中裕一によって行われたこの授業の記録を読んだとき、自分はこの授業を受けた子どもたちが羨ましいと率直に思った。そこには、「他者の苦しみ」に向き合いつつ、それをつくりだしている社会構造とそれを捉え返す視点についての学びがあったからである。
- ぼく自身の環境教育学の探求はこのパンフレットを読んだときに始まった。

2003年12月、田中先生死去

- 学部生のとき以来親しくしていただいてきた田中先生が2003年の暮れに亡くなった。ときに安藤は44歳。
- 死の床にあっても水俣病を考え、語り続けていた田中先生とお別れしたあと、たとえこれからでも水俣に行き、学生さんたちと学びをつくり出したい、と思った。

やってみる！

スタートは2005年9月

「水俣に行くぞ！」というかけ声のもと、15名の学生さんたちが集まってきた。

最初から「想定外の学び」の世界へ

中原八重子さんとの出会い

- 2度目の合宿となった2006年8月、ぼくらは鹿児島県出水市の未認定患者・中原八重子さんと出会う。
- 八重子さんの語る言葉、とりわけ「私たちの話を聞いて下さるだけで救われます」という言葉は、学生たちに強い衝撃を与えた。

渡会真琴さんの総括文

「まず、水俣病だからといって、水俣ばかりしか見ていなかったことに後悔した。とても悔しかった。そして、水俣病であることを認めたくはなかったという気持ちが、今までよりもすごくリアルに私たちに伝えてくれた八重子さんに、本当に感謝したいと思う。自分のことを人に話すというのは、自分自身と向き合わなければできない行為だと思う。自分のことを知ってもらうには、自分のことを自分が知らなければいけない。ただ、その行為は、水俣病を背負ってきた八重子さんや息子さんにとって、とても苦しく、辛いことを通してあると思う。私たちが、八重子さんが伝えてくださったことを、八重子さんは私たちに話をしてくださることによって再び見て、感じたのだろうと思うと、「本当に、本当に、ありがとうございました。」と何度も言いたくなる。

渡会真琴さんの総括文

「私たちの話を聞いてくれるだけで救われます。」という八重子さんの言葉は、きっと忘れないと思う。私のことを救ってくれた言葉だからだ。「こんな私に誰かを救うことができるのか」と、そんなことばかり考えていた私だから、本当にこの言葉は、大切なものになった。〔中略〕私は「誰かを救いたい」とばかり思っていたからだ。「誰かを救いたい」という気持ちを持つことは、すばらしいことかもしれない。でも、その気持ちに迷って立ち止まっているということは、きっと、どこかに偽善の心があるからだろう。まさに、私はそれで、私の「誰かを救いたい」という感情は、まったくの心の中からの感情ではなかったのだ。それに、気づかされ、「誰かを救うために水俣病を勉強する」という言葉だけで自分を動かしていこうとするのはやめようと思った。実際にその苦しみを背負った人から聞く苦しみは、今まで文章などで間接的に見た苦しみよりも心に届く。そんな苦しみが心の中に届いたら、心はとても痛い。でも、私は、「この苦しみを伝えていかなければ」と、本当に心から思った。痛みや、苦しみを私も背負うことで始めて、それを伝えていくことができるのだと思う。中原さん親子も背負っているものがあるからこそ、私たちに伝えてくれた。私も伝えよう。そして、中原さん親子の優しさを忘れずに生きていこう。」

「伝えたいぬくもり」作詞・作曲　渡会真琴

戸惑う心ばかりを 見ていた
戸惑う心が すべてを不安に変えてた
でも 出会う人 出会うもの 出会う景色 が ひとつひとつ
そっと私の 心の中に 灯を灯してくれた
あなたの手は とても 温かかった
あなたの手は とても 温かかった
そこに繋いだ あなたの手 と 私の手の中
ほんの少しの 小さなぬくもり
その 小さなぬくもり を 伝えることから はじめようと思った

「生の水俣」を表現する

2009年3月には中原さん母子をさいたま市にお招きし、約100名の観客のまえで構成劇を行った。

こうして水俣合宿は始まった

積み重ねてきたこと

水俣合宿のかたち

- 2005年に始まり、今年に至るまで、13回の合宿を行ってきた。
- 参加者は少ないときで12名、多いときは30名になった。
- 2008年度以降は、学生さんの申し入れを受けて、「学生主体」で運営してきている。以後、合宿は基本的には「単位」化されていない。
- 合宿自体は３泊４日、宿泊場所は水俣病センター相思社（自炊）と決めている。経費は５万円前後。
- 内容は室内での「お話」と室外での「体験」との大きく２つの部分によって構成される。

水俣合宿の１年

- ４月～７月：安藤の「環境教育概論」等の授業で水俣学入門的な学びを行う。
- ５月頃：学生さんによる説明会or授業中のアピール
- ６月～合宿直前：事前学習会
- 合宿（８月末or９月上旬に３泊４日）
- １０月～１月頃：事後学習会

「私にとっての水俣で学ぶ意味」（2017年度説明PPTより）

- **聞き取り**

  水俣病によって影響された人々と同じ空間で、その場の空気を感じ、お話や語り部さんの心境をより正確に捉えることができる。

- **街歩き**

  水俣病事件に関係する場所を実際に見ながら話を聞き、臨場感が湧いてくる。

- **とんとこ漁**

  漁師さんの生活の一端に触れることができ、おいしい魚ときれいな海を楽しむとともに、自分と自然の関係性を見つめ直すチャンスにもなる。

- **水俣に泊まること**

  現地の方との意外な出会いがある。また、仲間と話をする時間がたっぷりあり、自分のことをより深く捉え直す機会にもなる。

事前学習会

- 毎週１回。３時間～５時間程度。
- 水俣病学習の拡大（テキスト輪読、ドキュメンタリー鑑賞）
- 過去の「お話」の記録を読む
- 合宿でお会いしたい人、やりたいこと、を話し合って決める
- 「お話」に対する質問の検討
- 自分自身の関心を書いて読み合い、議論を行う
- その他のマネージメント（アポ取り、交通手段の確保、食事のメニュー決め、食材の事前予約、しおりづくり、集金、等々）

例）2014年度のスケジュール

	8/19	8/20	8/21	8/22
午前	755　羽田空港発 945　鹿児島空港着 →　レンタカーで水俣へ 1200　まつぼっくりで昼食	830-900　相思社朝MTGで自己紹介 930-1100　生駒秀夫さんのお話 昼食	930　丸島新港発 不知火海にてトントコ漁	900-1000　相思社水俣病考証館見学 1100-1200　JNCの見学
午後	1300　相思社着 1500-1630　上野真実子さんのお話 買い出し	1400-夕方　中原八重子さんと出水市名護地区を歩く	黒島（無人島）にてBBQ 1600　丸島新港帰着 →　湯の児温泉	昼食 1300-1700　水俣市内の町歩き
夜	BBQ@相思社	中原さんと夕食をつくって会食	夕食後、遠藤さんの話を聴く会＋ふりかえり	2035　鹿児島空港発

2016年度合宿の風景

たくさんの方々にお話いただき議論してきました

あらゆる機会をとらえて語り合う

超人気は不知火海でのトントコ漁

ごはんは合宿の土台

事後学習会

- 秋以降、事後学習会を行う。これも毎週１回、３～５時間程度。
- 最初は、合宿の概括的な感想を出し合い、以後「個人総括文」の作成、読み合わせと議論、修正、最終発表、という形ですすめていく。
- そこでは、水俣病にかかわる様々な人々・出来事・風景と自分自身とのかかわりがめくるめく書き込まれ、ひとつのストーリーを形作っていくことになる。

総括文のタイトル

- 「「犠牲のシステム」としての水俣と沖縄」
- 「私が、今、水俣を学ぶ意味」
- 「どう生きるのか、を考え続ける」
- 「今、僕は何を問えばいいのだろう；他者の経験の深い理解のために」
- 「水俣合宿とともに課題をもって生きる」
- 「伝える」
- 「水俣学習会の意義とは？；「固有名詞で紡がれる共同学習」の楽しみ」
- 「我々はどこへ行くか；自分自身の価値観を問う」

水俣学と自分学

水俣合宿が行ってきたこと

- 文字の世界と生きられた世界とをつなぐ学びのスタイルを水俣をフィールドとしてつくりあげてきた
- 学年・専修・大学を超えた共同学習の機会を持続的に設営してきた
- 合宿そのものが＜耳＞となり、多くの関係者の話を聞き取る機会を得てきた
- 多くの学生さんたちがこの合宿を通して自らの学びの基盤を形成した
- 合宿参加者との交流を通して患者さんやその家族・支援者等が勇気づけられてきた
- 水俣現地や関係者との多様なネットワークが広がり、「水俣めぐる学びと交流のネットワーク」が築かれてきた
- 水俣合宿は「水俣学」と「自分学」（自己を環境/社会のなかに位置づけ直し、再定義する知的営為）とを統合するひとつの試みである

つながりながら生きる

水俣合宿の位置

	〈人間-環境〉系	人間形成システム
伝統社会（狩猟採集社会／農耕社会）	濃密	フィールドでの学び
工業化社会	希薄化・切断 ↓↑ 公害・環境問題の拡大再生産	学校教育システム ↓↑ 敵対的競争/自己喪失
新しい学	水俣学	自分学
ポスト工業化社会	再構築 → 水俣合宿 ←	再環境化

これからのこと

水俣合宿の危機

- 水俣合宿は絶えず２つの力によって危機に曝されている
- ひとつは教育システムにグローバル競争を貫徹させようとする力学
- もうひとつは公害問題を不可視化・過去化しようとする力学
- この２つの力学に抗いつつ学びの場をどう維持し、質的に高めるうるか、が課題

今後の課題

- 一年一年合宿に取り組み続けること。とりわけ事後学習を丁寧にやること
- 学生と教員との役割分担の調整を状況に応じて適宜行っていくこと
- 開かれた学習の場づくりに絶えず努力すること
- 教員自身が水俣での探求を怠らないこと
- 他の公害・環境問題にかかわる学びにも視野を広げ、つないでいくこと（とりわけ原発問題）

水俣−チェルノブイリ−福島をつなぐ

水俣−チェルノブイリ−福島をつなぐ

おわりに

- 水俣合宿は何よりも教員であるぼく自身の学びの場であった。
- 水俣で学生さんたちはふだんとは異なる表情や行動をし、異なることばを紡ぎ出す。何よりもこの合宿はひとりひとりの学生さんを理解し、学びの可能性を考えるうえでかけがえのない場であった。
- それが可能であったのは、この合宿を支えて下さった方々がいらっしゃってくださったからである。ご協力いただいてきたすべてのみなさまに心から御礼申しあげます。